イタリアワインは気温上昇下でもフレッシュさを維持、報告書が指摘

Gambero Rossoは、樹冠被覆、土壌管理、柔軟な収穫時期の判断が、栽培者による酸、バランス、香りの明瞭さの維持に役立つとしている。

2026年9月21日（月）



イタリアのブドウ栽培者は、より暑い夏、干ばつ、圃場での熟度進行の早まりに直面しているが、瓶の中で見られる結果が、多くの人が予想したような、より重く、フレッシュさに欠けるワインであるとは限らない。Gambero Rossoの最近の報告書によれば、逆の傾向が多くの場合に見られており、強い高温下でも、イタリアワインの多くはなお酸、バランス、香りの明瞭さを保っているという。

これはワインに関する一般的な見方に反する。温暖な条件では通常、ブドウはより早く糖を蓄積する。単純に言えば、それはしばしばより高い潜在アルコール、より熟した風味、そしてワインがふくらみすぎたり重く感じられたりするリスクの高まりを意味する。同じ条件は、技術的成熟と酸の低下との間の期間を短くすることもあり、収穫時期の判断を難しくする。長年にわたり、こうした

圧力は気候変動が欧州のワインをどう変えているかをめぐる議論の中心にあった。

Gambero Rossoが強調しているのは、ワインのスタイルを気温だけで予測するよりも、ブドウ畑での作業のほうがはるかに重要だという点だ。記事は、ブドウ樹、樹冠、土壌の保護と、収穫の判断を、造り手がフレッシュさを保つうえでの主な手段として挙げている。根底にある考え方は、栽培者がストレスを抑え、熟度の不均衡の進行を遅らせ、果実を過度に熱せずに制御された形で日光にさらすことによって、極端な天候に対する植物の反応を左右できるというものだ。

樹冠管理はその取り組みの中心だ。葉は房を守る覆いとして機能し、その使い方は日射量とブドウの温度の両方に影響しうる。非常に暑い時期には、過度の曝露が日焼けや急速な脱水のリスクを高める。より保護的な樹冠は、最も暑い時間帯に果実を守り、ブドウがバランスを失う速度を抑えるのに役立つ。土壌管理も重要で、より健全で水分保持力の高い土壌は、植物に深刻なストレスを強いることなく乾燥期を乗り切る支えになる。

収穫時期ももう一つの要因だ。温暖化が進む中では、糖度がフェノール的成熟や香りの成熟よりも早く上がる場合、従来の収穫日まで待つことが危険になりうる。早めに摘むことは一つの対応策だが、Gambero Rossoの記事がより広く示しているのは、判断は固定された暦ではなく、そのブドウ畑の実際の状態に結びつける必要があるという点だ。季節の動きを注意深く読む生産者ほど、ワインに張りと飲みやすさを保ちやすいかもしれない。

報告書はまた、答えは主としてブドウがセラーに入った後にワインを「補正」することではないとも示唆している。この違いは、焦点を醸造上の調整から圃場での判断へと移すため重要だ。実際には、最終製品の品質は、醸造中に不均衡を修正することよりも、そもそもブドウ畑でその不均衡を回避できるかどうかに、より左右されることを意味する。栽培者と醸造家にとっては、より多くの観察、区画ごとに合わせた作業、場合によっては長年の慣行の見直しが必要になることもある。

この問題は飲料業界にとっても幅広い意味を持つ。ワインのスタイルは商業上のポジショニングと直接結びついているからだ。生産者がより暑いヴィンテージでもフレッシュさと香りの輪郭を保てるなら、原産地呼称のアイデンティティを守り、よりバランスの取れたワインを求める消費者需要に応え、画一的に重いスタイルへと流れるのを避けやすくなる。ワイナリー、輸入業者、流通業者にとっては、調達、価格設定、市場での見せ方に関する判断に影響しうる。また、より変動の大きい栽培条件の下で酸と精密さを守る必要があるスティルワインとスパークリングワインの生産者にとって、実務的な指針にもなる。

このメッセージは、気候や標高が大きく異なるワイン産地を抱えながら、いずれも温暖化の影響にさまざまな形で向き合っているイタリアで、とりわけ重要だ。その文脈では、論点は気温が上昇しているかどうかだけでなく、どのような農法上の対応が有効なのかにもある。Gambero Rossoの報告は、暑い季節は自動的により重いワインを生むという単純な考えよりも、よりニュアンスのある実像を示している。

それは、気候変動による圧力が和らいだという意味ではない。熱と水分ストレスは依然として大きなリスクであり、成熟の加速は多くのブドウ畑にとって構造的な問題のままだ。だが、Gambero Rossoが描く経験は、結果があらかじめ決まっているわけではないことを示している。ブドウ畑の保護、土壌管理、適切な収穫判断は、ワインがフレッシュさを保つか失うかを左右する決定的な違いをなお生みうる。地域性を手放さずに適応を図ろうとするこの業界にとって、これは現場で最も

重要な実務上の教訓の一つになりつつある。